

帯広測候所

帯広測候所は「十勝三等測候所」として明治25年1月7日、十勝の開拓に必要な気象条件を知るために、晩成社（現在の水光園付近）の一農舎（草小屋）を借りて創設されました。当時の所属は北海道庁内務部農商課で農事試験も兼務していました。

創設当初、職員は1名で一日3回（6、14、22時）の気象観測を行っていましたが、時代の変化に伴って業務の拡充を行い、それに合わせるように庁舎・人員も拡充していきました（現在職員13名）。



帯広測候所 こんな日がありました

1970（昭和45）年3月16日 日降雪量102センチ



測候所の露場（百葉箱）

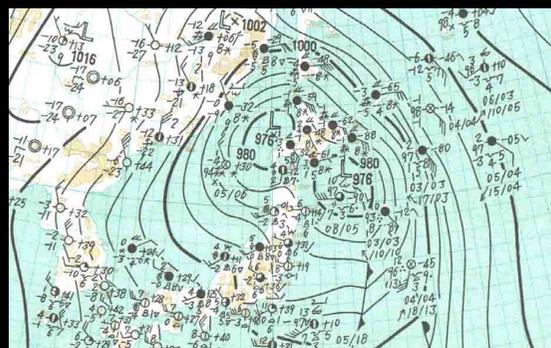
帯広測候所で1日の降雪量が最も多かったのがこの日でした。日本海と本州南岸の低気圧が発達しながら北海道付近を通過し、1日で1メートルを超える大雪となりました。昼前から雪の降り方が強まり、夜にかけて降り続いたため、朝登校した児童生徒が帰ることができず、学校に缶詰めになったり、交通がマヒしたりと影響が長引いたようです。



測候所の測風塔から



屋根の雪を下す人々



スタックした車を押す人々

帯広測候所 こんな日がありました

1952（昭和27）年3月4日 十勝沖地震



大津市街 倒壊した建物

10時22分43秒に十勝沖を震源とする地震が発生しました。帯広測候所や本別通報所で、震度5を観測しました。この地震により、死傷者が出たほか、多数の家屋や船舶への被害が発生しました。また、3月という時期だったため流氷が津波とともに押し寄せました。



湾曲した線路
豊頃一吉野間



利別 堤防の地割れ



浦幌町厚内に打ち寄せた流氷

帯広測候所

佐幌岳にも測候所がありました

佐幌岳測候所

昭和10年代、航空機の発達により定常的な高層気象資料が必要となり、昭和15年に札幌で高層気象観測を開始。その後、さらに詳細な高層気象データが必要となり、全国の山岳において観測所の配置が求められ、昭和18年10月1日に創設されました。観測内容は概ね今の帯広測候所と同じでしたが、観測機器は風向と風速を別々に観測していたり、視程の観測は4方位を詳細に観測したりと違っていました。また、冬の観測は雪や風との戦いであり、当時の職員の測候精神には頭が下がる思いです。その後、役割を終え昭和24年11月1日に廃止となりました。



佐幌岳測候所（夏）



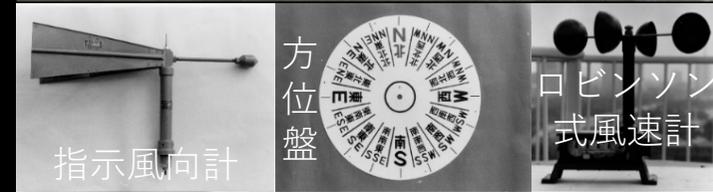
佐幌岳測候所（冬）



測風塔での観測風景



等間隔に並んだ視程目標



指示風向計

方位盤

ロビンソン式風速計

帯広測候所

100年以上前ですが、測候所以外にも観測所がありました

区内観測所

区内観測所は、気象や気候の特性、適した農作物の調査には気象官署だけでは少ないだろうということで、委託による気象観測を行った観測所です。アメダスの人海戦術版といったところでしょうか。
十勝で一番古い記録は明治35年1月というものがあります（右写真）。測候所が創設して10年後のことです。当時行っていた観測やその内容が記録されており、貴重な資料となっています。



区内観測所の観測成果を
まとめた区内気象表

A large, detailed handwritten weather observation table for the year Meiji 35 (1902). The table is organized into columns for different locations and rows for different weather parameters. The locations listed include various districts in the Tokachi region. The parameters recorded include temperature, precipitation, and other meteorological data. The table is written in Japanese and is a comprehensive record of the weather for that year.

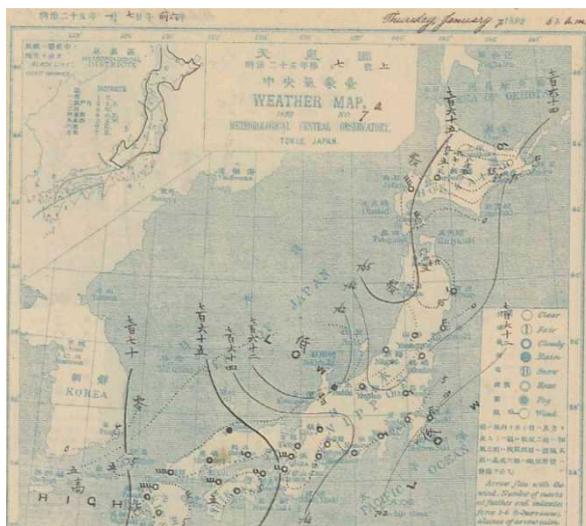
十勝最古の区内気象表
「茂寄村（広尾町）」

「創設から 130 年を迎えて」

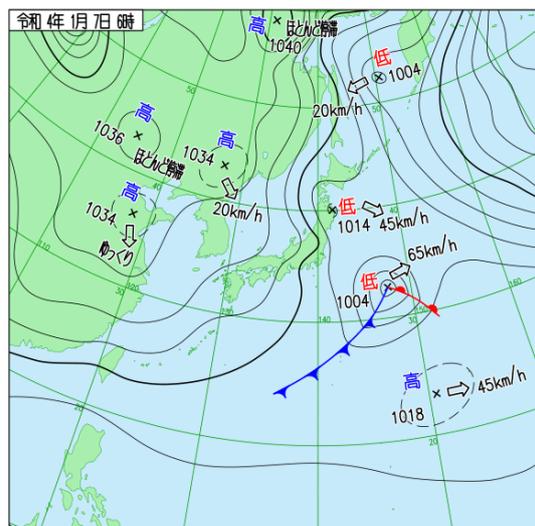
帯広測候所は明治 25 年 1 月 7 日、晩成社の草小屋を借りて、職員 1 名によって一日三回、気温・風向風力・日照時間・降水量の観測を開始しています。開拓を進める方たちの並々ならぬ努力、そしてバツタや洪水被害への落胆を間近で感じ、当時は彼らとともに日々の天気に一喜一憂しながら自然現象に向き合っていたものと想像しているところです。時は進み戦後の昭和 20 年代後半には予報官が配置されるなど、現在のように十勝地方の警報や予報を発表する形態が確立しました。そして今も諸先輩たちが続けてきた観測や予報業務を継承し、その品質管理等に努めています。この地の発展と共に業務を続けてきたことは、我々にとって誇りと喜びであり、同時にその責任の重さをあらためて思う次第です。

情報通信技術の開発が進み、観測データを含めた各種気象情報はだれもがいつでも入手できる時代となりました。これらの情報がより一層活用され、さらなる十勝の発展に貢献していけるよう、住民の皆さまの声を聞きながら職員一丸となって取り組んでいきます。今後ともよろしくお願ひします。

令和 4 年 1 月 7 日 所長 青木康友



明治 25 年 1 月 7 日 6 時の天気図
最低気温 - 27.2℃



令和 4 年 1 月 7 日 6 時の天気図
最低気温 - 12.8℃

帯広測候所の沿革（以下リンク先）

<https://www.data.jma.go.jp/obihiro/about/enkaku.html>